美満津商店の製造工場に関する一考察

――『THE MIMATSU' S Catalogue 1922–1923』を手がかりとして ――

中　嶋　　健

目　次

1. はじめに
2. 美満津商店亀戸工場
　1）『THE MIMATSU'S Catalogue 1922 -1923』における美満津商店亀戸工場絵図
　2）美満津商店亀戸工場の所在地
3. 政府・地方行政機関の工場調査における美満津商店製造工場
4. おわりに

1．はじめに

伊東卓夫は、1882（明治 15）年 5 月に東京神田区猿楽町 2 丁目において、日本におけるスポーツ用品製造販売業者の草分け的存在である美満津商店を創業した。その後、美満津商店は、1890（明治 23）年 8 月から 1895（明治 28）年 7 月までの期間に、現在の東京大学赤門前の東京本郷区本郷 5 丁目 10 番地に移転した[1)]。そして、創業後 10 年をまたずに、同地 12 番地に新店舗を開店するまでになっている[2)]。

美満津商店が製造・販売していた商品は、同商店発行の各種カタログによって明らかになるが、1904（明治 37）年発行の『美満津商店総目録 No.19』[3)]には、店舗と小売店舗内部、製造工場の写真も掲載されている。図 1 は、同カタログの裏表紙に掲載された美満津商店の「体操部店舗」と「標本部及び楽器部店舗」の写真である。建物はそれぞれ 2 階建てであったが、1909（明治 42）年のカタログ『美満津商店目録』[4)]の裏表紙に掲載されている店舗写真（図 2 ）を見ると、「標本部及び楽器部建物」が 3 階建てに改築され、「陳列即売館」と名付けられている。同カタログに掲載されている図 3 と図 4 のような店舗内部の写真から推察すると、1 階の小売店舗は、1904（明治 37）年時に商品陳列が目的であったもの（図 5 参照）が、販売店員が対応する小売りス

図 1　美満津商店体操部・標本部及楽器部店舗の写真（『美満津商店総目録 No.19』〔1904（明治37）年〕裏表紙より）

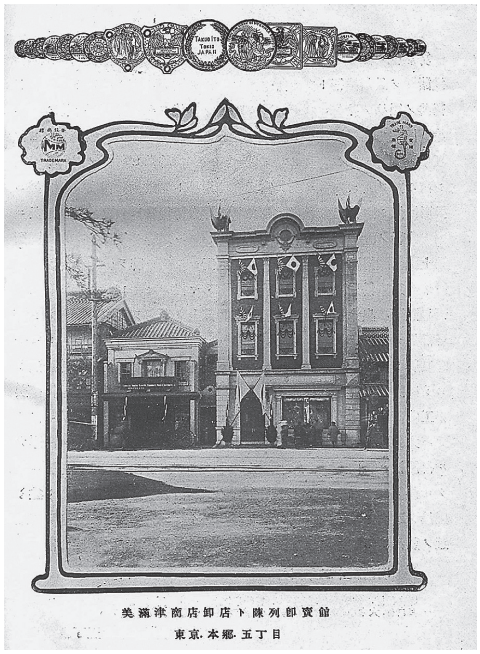

図 2　美満津商店卸店・陳列即売館店舗の写真（『美満津商店目録』〔1909（明治42）年〕裏表紙より）

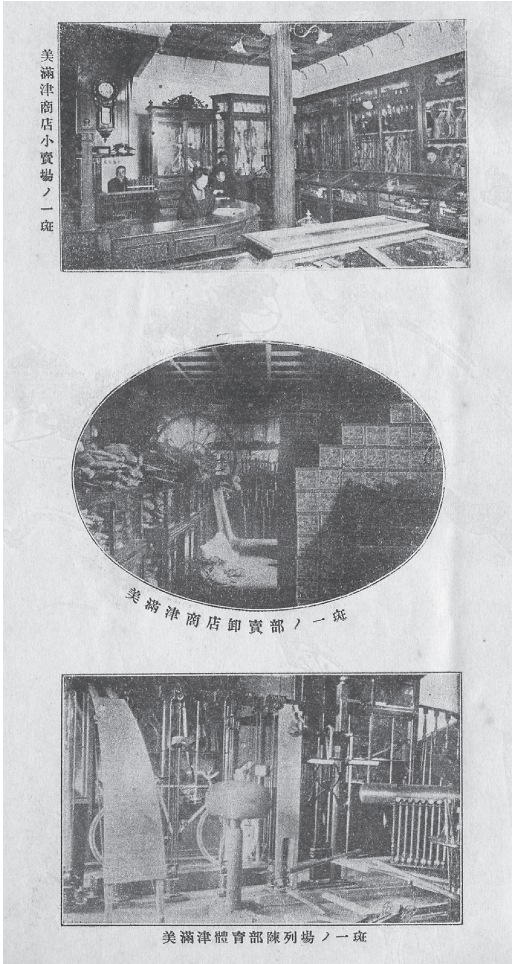

図3　美満津商店店舗内部の写真
（『美満津商店目録』〔1909（明治42）年〕より）

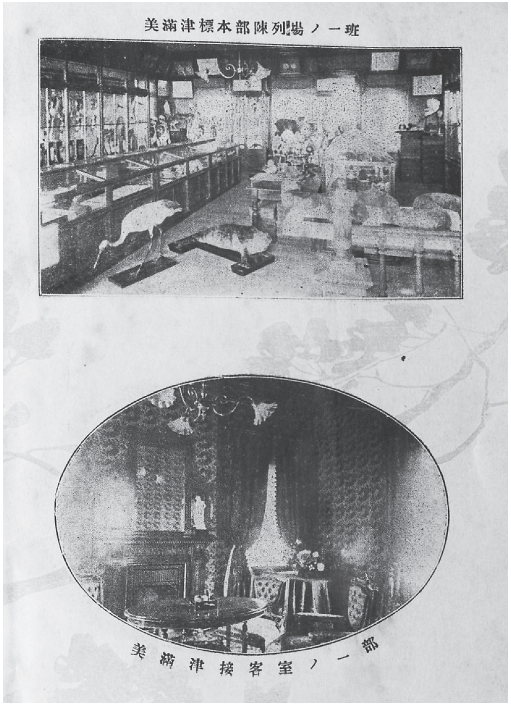

図4　美満津商店店舗内部・接客室の写真
（『美満津商店目録』〔1909（明治42）年〕より）

ペースへ改修されたことがわかる。

また、2階及び3階部分は、体操器械・スポーツ用品と学術標本類の陳列室、商談用の接客室になっていたと思われる。1904（明治37）年時点の「体操部店舗」は、「美満津商店卸店」となり、図3の中央の写真はその内部の様子である。

ところで、図6は「明治二十九年五月調査東京市本郷区全図」における美満津商店所在地付近の地図である。地図中の丸で囲んだ部分に本郷5丁目10番地、12番地がある。図2の店舗写真と照らし合わせると、本郷10番地が「陳列即売館」、同12番地が以前「体操部店舗」であった「美満津商店卸店」である。

これまで述べてきたように、美満津商店の店舗のこのような経緯から判断すれば、同商店の博物・動物学標本等と体操器械・スポーツ用品の製造販売業者としての業績は、創業後わずか約10年の間に急激に拡大していったと考えられる。

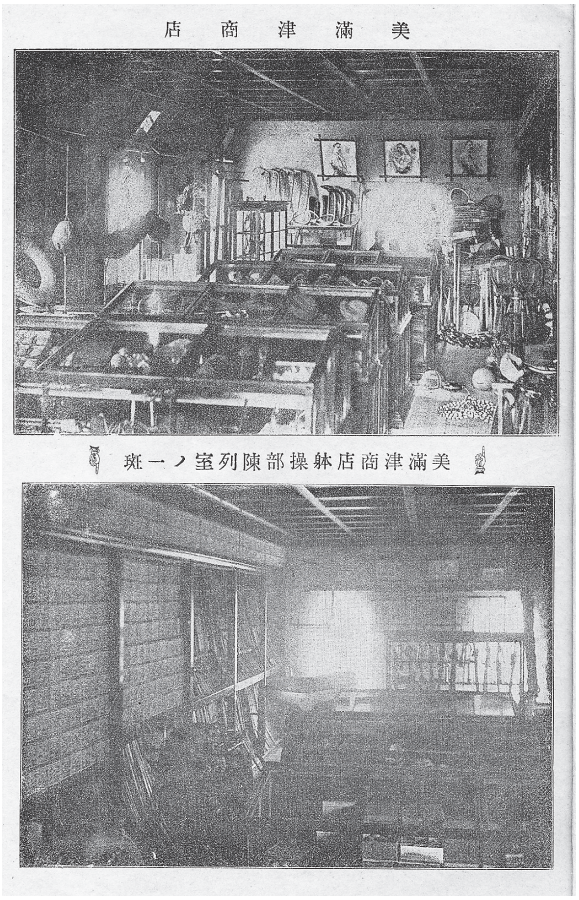

図5　体操部店舗内部の写真
（『美満津商店総目録 No.19』〔1904（明治37）年〕より）

さて、図7は、1904（明治37）年発行の『美満津商店総目録No.19』に掲載された同商店工場の写真である。上から「美満津商店体操部革工場ノ一班」、「美満津商店体操部球工場ノ一班」、「美満津商店体操部テニス工場ノ一班」として3点の写真が掲載されている。これらの写真から、当時の美満津商店のスポーツ用品の製造は、動力を使わない「少数の雇用労働に依存する小経営」であって、「近世以来の伝統的な商品の生産流通ないしサービスの提供にたずさわる産業」であったことがわかる[5)]。

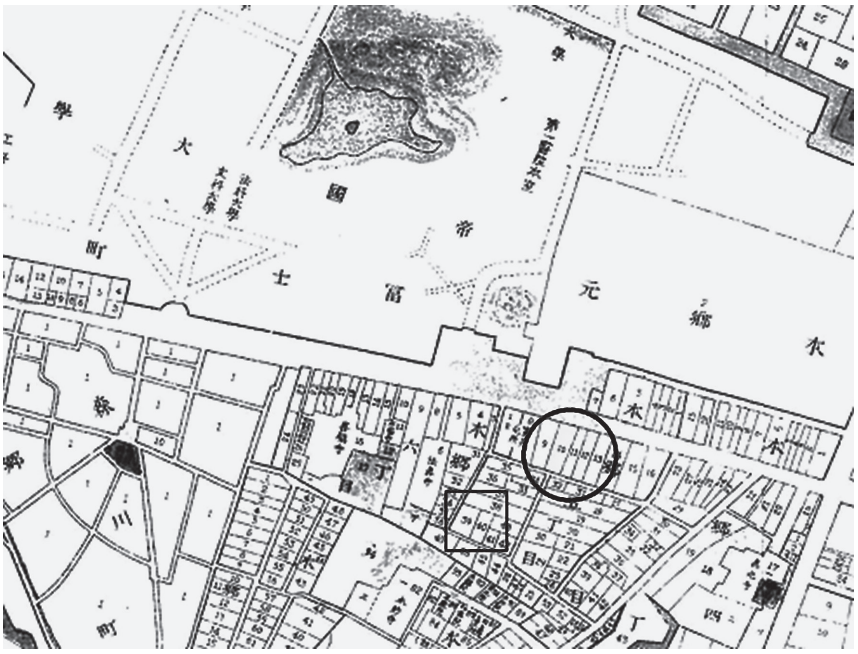

図6　美満津商店店舗所在地
（「明治29年5月調査東京市本郷区全図」の一部より）

これらの写真から可能なかぎり当時の製造状況を読み取れば、革工場の写真では、10数名ほどの男性工員が野球グラブ・ミット用の革の裁断とその縫製を行っている。写真手前にはキャッチャー用胸当が写っている。2点めの野球ボール工場の写真は、20名をこえる女性工員が、大量の野球ボールを箱詰めしている。3点目のテニス工場は、2点目の野球ボール工場と同様の作業室のようで、10名ほどの男性工員が、完成したテニスフレームへのガット張りとその調整・確認作業を行っているようである。図8では、「美満津商店体操部テニス工場ノ一班」と「美満津商店体操部塗物工場ノ一班」と題する2点の写真が掲載され、5名程度の男性労働者が、テニスラケットフレームを製作している場面とテニスラケットと野球バットの塗装作業を行っている場面を写しだしている。ちなみに写真を拡大し確認すると、この写真の中央部には「就業時間午前八時ヨリ午后十時マデ」と記された黒板が掛けてあり、これは、当時の労働条件に関わる事実として興味深い。

図7　美満津商店体操部工場
（『美満津商店総目録No.19』〔1904（明治37）年〕より）

1904（明治37）年と1909（明治42）年の美満津商店カタログに掲載されている店舗の外観や店舗内写真と商品製造工場の写真から判断すれば、この時期の美満津商店の工場の広さは、10名から20名程度の工員が作業をする程度の規模であったと推察できる。けれども、実際に商品の製造のためには、工場・作業場以外にも木材等の資材置き場、商品運搬や大型商品保管等のスペースは必要であったであろ

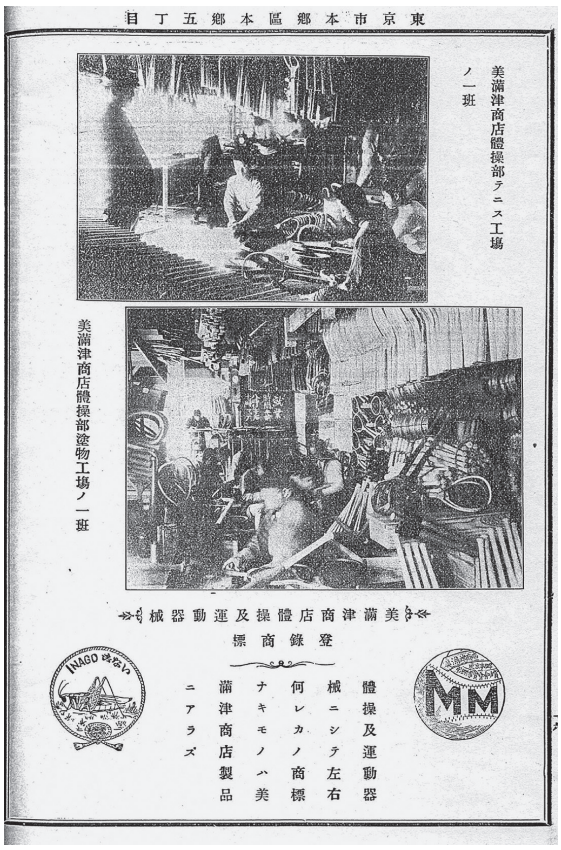

図8　美満津商店体操部テニス工場・塗物工場
（『美満津商店総目録 No.19』〔1904（明治37）年〕より）

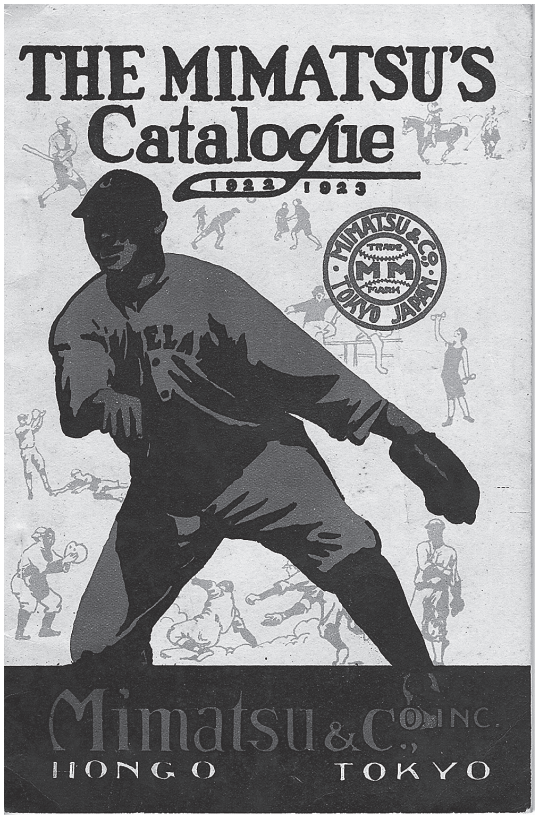

図9　美満津商店カタログ
『THE MIMATSU'S Catalogue 1922－1923』表紙

う。具体的には、美満津商店は、1915（大正4）年以降はスキーなどの冬季スポーツ用品やテントなどのキャンプ用品の製造・販売をはじめ、1920年代以後は、バスケットゴール、トレーニング機器やロッカーなどの体育館設備やすべり台やジャングルジムなどの公園遊具なども製造・販売するようになる[6]。

では、美満津商店は、どのような工場や作業場をどこで営業していたのであろうか。本研究では、この課題を1923（大正12）年発行の美満津商店カタログ『THE MIMATSU'S Catalogue 1922-1923』[7]（図9）と行政機関の工場統計資料から明らかにすることを目的とする。

2. 美満津商店亀戸工場

1）『THE MIMATSU'S Catalogue 1922－1923』における美満津商店亀戸工場絵図

美満津商店の体操器械・スポーツ用品の製造・販売状況を詳細に知り得る経営1次史料はまだ発見できておらず、作業場あるいは工場の存在を証明するものは、「はじめに」において述べたカタログ掲載写真と1928（昭和3）年のカタログ『Mimatsu's Sport Goods』[8]の謹告において、「…各種の運動用具の製作者たる合名会社美満津商店は、児童、少年、少女、青年の使用する用具の製造及び進歩改善に献身的努力を殆んど半世紀近くの年月の間盡して参りました。創業されましたのが明治十五年五月、無限責任社員を以つてインコーポレテッドされましたのが、大正八年であります。弊社経営の亀戸工場は上記の各種運動具を製作致しますに十分、且つ完全に設備されて居ります。（傍点著者）…」と記された文章、これ以後に発行されたカタログ内記述だけであった。このため1904（明治37）年の作業場や工場と「亀戸工場」が、どこに、どの程度の規模で存在したかは不明であった。

図10は、美満津商店亀戸工場の全貌が示された絵図である。写真史料ではないので、若干の誇張や省略はあるだろうが、ここに描かれた店舗の絵図を図2の写真史料と比較すれば、店舗建物の高さに、紙面割りとの関係から意図的な変更があるが、概ね正確に表現されている。このことから、この亀戸工場絵図が極端に不正確であるとは考えにくい。絵図では、正門を入って左手にL字に建てられた1棟、

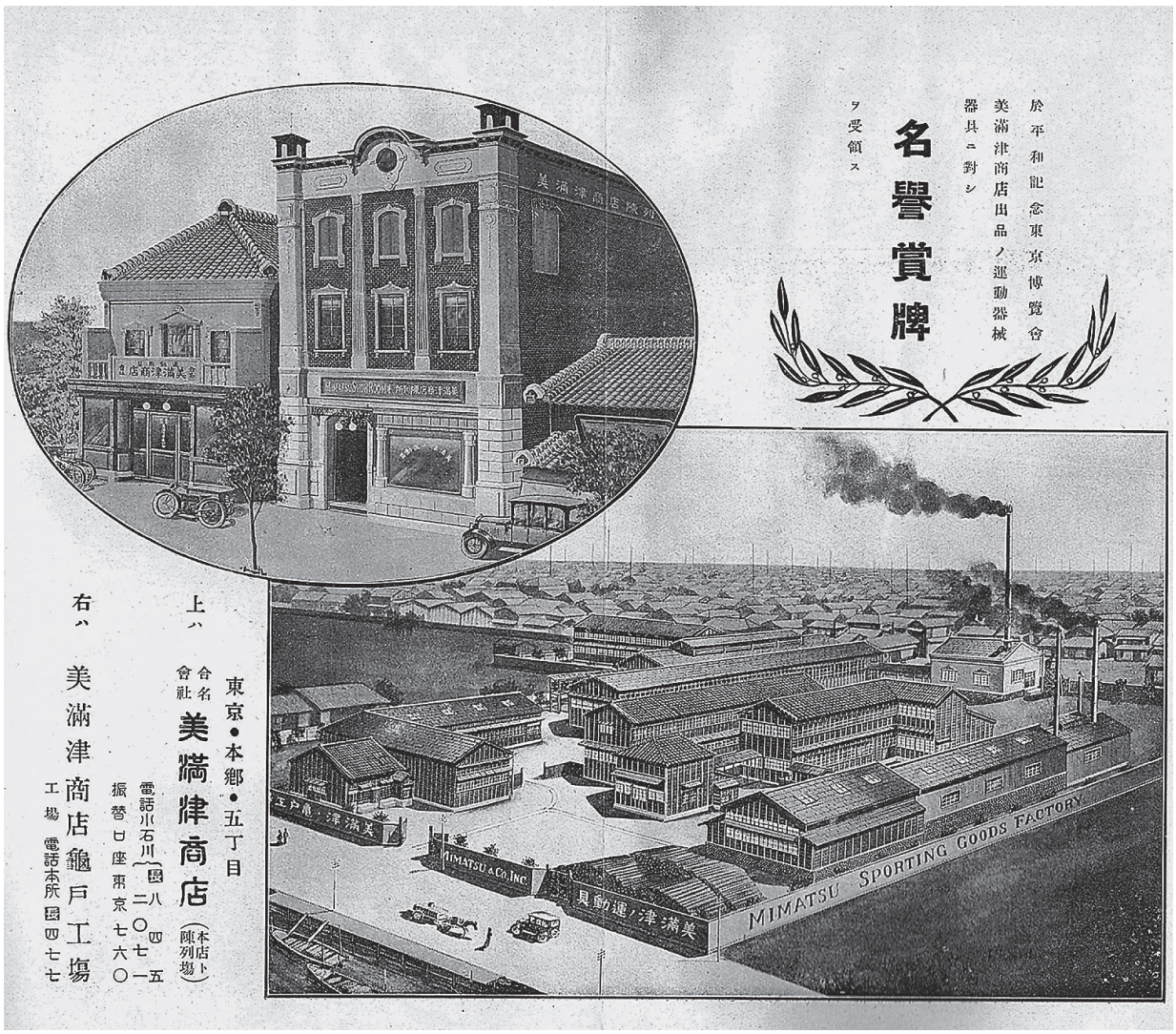

図10　美滿津商店亀戸工場絵図（『THE MIMATSU' S Catalogue 1922－1923』より）

正門から見て縦に右から5棟、絵図中央上部に横向きに1棟の計7棟の建屋が描かれている。このうち煙突のある建屋が2棟あるが、これらの内どちらかあるいは両棟とも、当時一般的であった石炭による蒸気機関動力の供給施設であったと推察できる[9]。絵図の上部には、同様の煙突を設けた工場群の広がる模様が描かれていて、この地域一帯に工業地帯が広がっている様子である。想像の域を出ないが、7棟の建屋は、工場、自宅を兼ねる事務所棟[10]の他に工員寮などもあったのではないだろうか。正門を入って右側には、テニスラケットやバット、スキーや体操器具など木製体育・スポーツ用品の材料である材木が山となって積まれている。工場正門前の水路は、これらの資材の運搬や製品の積み出しとして有効であった。

美滿津商店亀戸工場の詳しい所在については次で述べるが、亀戸を含む東京東部に広がる東京低地（現在の江東区、墨田区、江戸川区）一帯は、当時どのような地域であったのだろうか。

日本の近代的工業化は、明治新政府の殖産政策に始まる。しかしながら、1880年代以降、政府の財政難により、主要工場は官営から民営へと移っていく。特に東京低地一帯は、縦横に張り巡らされた運河沿いに明治中期から大小の工場が立ち並ぶ有数の工業地帯であった[11]。1930（昭和5）年に、東京市による工場統計を分析し、工場分布と工場位置決定要因に関する研究を行った武見は、「此の地域は消費都市として発生し成長して現在に至り、生産都市としても我が国の主要な工業地域でもある。即ち昭和3年10月には現在の工場法による工場数が7,453、職工数は208,579に達し、其他にも非適用工場の数は29,567を算し、有力工場のみに就いて観ても、

内地全体に対して工場数に於て14.2%、職工数に於て10.8%を占める。昭和2年度の工産総価は11億円に及び、実に内地の6分の1に相当している」[12)]と述べている。武見は、工場分布の分析において、昭和初期には江東方面、特に王子町、千住町に製革業が多く存在すること、護謨工場が江東及び江北一帯に最も多く、製材工場の大多数が深川区の木場町付近に密集していることを明らかにしている。日本で最初に軟式ボールを開発した三田土ゴム会社は、1886（明治19）年にこの地域で創業している。このように、この地域は、美満津商店の商品製造における資材確保並びに製品運搬輸送の両面において、適当であったと言える。

さて、ここで1つの疑問がわき上がってくる。これまで述べてきたように、本研究で手がかりとする1923（大正12）年のカタログの裏表紙には「ミマツーカタログ　自大正十一年秋期・至十二年春期」と記されている。つまり、このカタログは、1923（大正12）年9月に発生した関東大震災以前に発行されたものである。だとするとカタログに掲載された美満津商店亀戸工場は、関東大震災によって被害を被った可能性があり、この点を確認する必要がある。

結論から述べると、美満津商店は、関東大震災の被害は受けていなかった。

1921（大正11）年4月に東京における56の体育・スポーツ用品の製造販売業者は、「徳義ヲ重ンジ和親団結一致協力シテ営業ノ発達ヲ図リ共同ノ福利ヲ増進スル」ことを目的として、「東京運動具製造販売業組合」を結成した。同組合は、関東大震災後に組合員の安否を確認し、類焼による移動先、避難先等を調査した。調査の結果、1923（大正12）年9月における、組合員総数84の内、類焼被害が47業者、家屋店舗倒壊が2業者、安否移動先不明業者が9業者あり、全体の7割近くが被災している。この中で伊東卓夫は、「無事」と報告され、組合へ見舞金として寄付金五十円を拠出している[13)]。

さらに、警視庁保安部建築課調「大正12年9月震災東京付近ニ於ケル木造建物被害分布図」や震災予防調査会発行「東京火災動態地図」では、亀戸地区、本郷地区は大きな類焼被害はなく、木造建物被害も少なかったことを証明している。

2）美満津商店亀戸工場の所在地

美満津商店亀戸工場は、どこにあったのだろうか。図10には、「電話本所長477」と美満津商店亀戸工場の電話番号が記されているが、住所は明記されていない。そこで、東京市の電話番号簿を調査した結果、1927（昭和2）年10月1日付け東京中央電話局発行の『東京電話番号簿』において、美満津商店については「美満津商店　小石川85-0845・85-2071　本郷5ノ10」と示され、美満津商店亀戸工場については「美満津商店亀戸工場　墨田74－2390　南葛亀戸柳島449」と記されていた。

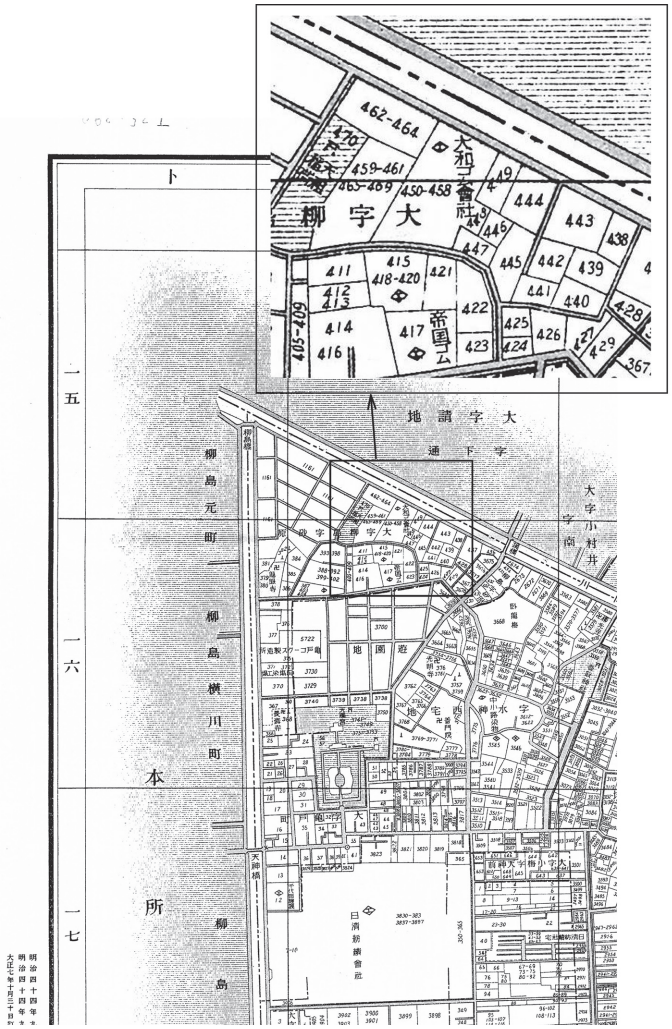

図11　東京府葛飾郡地図〔1918（大正7）年〕
柳島字砂原449番地

美満津商店亀戸工場の所在地は、「東京府南葛飾郡亀戸町柳島449番」[14]であることが明らかになった。

図11は、1918（大正7）年10月に逓信協会が発行した『東部逓信局編纂各郵便局御用番地界入東京府葛飾郡亀戸町大島町全図』の一部とその亀戸町柳島449番地付近を拡大したものである。柳島449番地の地籍はどうであったのか。東京市区調査会が1912（大正元）年11月に発行した『地籍台帳・地籍地図（東京）』[15]では、柳島449番地は、地目は「宅地」、坪数141坪、地価106円27銭で、同じ柳島416番地に住む大澤欽治が地主であった。また、隣接する大和ゴム会社所在地である柳島450-458番地も地目は「宅地」であり、坪数753坪、地価752円で地主は同じ大澤欽治であった。加えて本郷の美満津商店の所在地である本郷5丁目10番地は、地目は「宅地」、約220坪で地価5063円22銭であり、12番地は、地目「宅地」、138坪で地価が3291円であった[16]。

つまり、当時は「宅地」であっても工場を建設でき、地価からも急速に工業化していた「東京低地」地域に美満津商店が新しく工場を建設する条件は整っていたと思われる。

ところが、1912（大正元）年発行の同地積地図「亀戸町大字柳島字砂原」の地図（図12参照）では、柳島449番地には「上條鉛筆製作所」が記載されて

図12　地積図における1910（明治43）年当時の亀戸町大字柳島字砂原
（『地籍地図［東京］第7巻、地図資料編纂会編（復刻版）』、柏書房、1989年、186頁。）

表１　商工省編纂『全国工場通覧昭和６年９月』（日刊工業新聞社発行）掲載の体育・スポーツ関連用品工場

No.	部	工場名	住所	創業年月	製造品目	創業者名	掲載頁
1	金属工業の部	今村工場	京都市下京区東九条土殿田町	大正11年7月	スケート	今村大吉	417
2		菱KA金具商会工場	札幌北一条	大正8年5月	スキー金具	川端平治	418
3		ナショナルスケート製作所	札幌白石二条	昭和2年4月	スケート	有坂織之助	418
4	化学工業の部	大日本ゴム工業所	東京府北葛飾郡南千住町	大正2年5月	運動靴底	島藤麟	647
5		明生ゴム製造所	東京府北葛飾郡南千住町	大正3年	運動草履	植村勝太郎	648
6		長谷川工場	東京本郷区新花町	大正4年4月	野球用ボール	長谷川金蔵	648
7		染井ゴム製造所	東京北豊島郡巣鴨町	大正5年8月	ゴム球	田辺定吉	648
8		森ゴム工業所	東京府南葛飾郡寺島町	大正11年4月	足袋底、運動靴底其の他	森吉平	648
9		田端ゴム株式会社	東京府北葛飾郡瀧野川町	大正9年2月	ゴム鞠		650
10		日本ゴムボール製造所	東京府南葛飾郡吾嬬町	大正12年4月	ゴム製品	進土喜代太	650
11		カフイトゴム工場	東京府南葛飾郡寺島町	大正9年7月	ゴムマリ製造	金子源五右衛門	650
12		安本ゴム工業所	大阪東成区	大正2年9月	運動靴	安本京太朗	652
13		大阪ゴム底足袋株式会社	大阪東淀川区豊崎西通2	大正9年2月	地下足袋ランニング足袋	塩田力三郎	653
14		地球ゴム工業所	神戸浜添通川西通	昭和4年11月	帆布運動靴	万木茂一郎	653
15		染川ゴム工業所	神戸苅藻通	昭和4年11月	運動靴	染川嫌四郎	654
16		林ゴム工業所	神戸5番町	大正12年7月	運動ゴム草履裏	林又助	655
17		大福ゴム工業所	兵庫県飾磨郡細江	大正13年6月	フートボール中袋	高取浅次郎	655
18		丸和ゴム工業所	岡山県児島郡藤戸町	大正2年7月	運動靴底	渡邊謙次	655
19		赤丸ゴム株式会社	岡山県岡山市上石井	昭和2年2月	運動靴		
20		前田ゴム工業所	広島県広観音町舟入町	大正2年4月	運動靴	前田繁一	656
21		奥田ゴム工業所	広島県広島市三条町	大正15年2月	ゴム靴運動靴	奥田誠一	656
22		中山鞄セルロイド加工所	東京本所区緑町	大正13年3月	ピンポン用セルロイド加工	中山良一	667
23	製材及び木製品工業の部	日本体育工業社	北海道札幌市南二条西五丁目	昭和3年	運動機具	西野清太郎	768
24		岩崎スキー製作所	北海道札幌市南15条西5丁目	大正12年6月	スキー木製品其他		769
25		コタン運動具工場	北海道札幌市南1条西5丁目	大正12年5月	スキー踏切投	小谷満次	769
26		秋田木工株式会社	秋田県雄勝郡湯沢町	明治44年10月	椅子スキー	近利左衛門	769
27		青森スキー製作所	青森県青森市浦町	大正11年6月	スキー、其他		769
28		田中木工所	福島県郡山市原田町	大正12年2月	肋木、平行棒	田中鈴吉	770
29		小川工作所	千葉県千葉市千葉	明治10年2月	運動具其ノ他雑品	小川理三郎	770
30		杉田日進堂工場	東京府北豊島郡巣鴨町	大正9年11月	肋木、平行棒		771
31		山田ラケット製造所	東京府北豊島郡瀧野川町	大正11年10月	ラケットフレーム、スキー木材		771
32		菅沼商店玉台部工場	東京麹町区飯田町	大正13年4月	玉突台	菅沼恒次郎	771
33		玉澤運動具工場	東京牛込区山吹町	大正元年	バット、ラケット	玉澤敬三	771
34		金澤運動具工場	東京本郷区駒込坂下町	明治42年2月	バット、ミット、其他		771
35		森下ラケット製作所	東京北豊島郡下尾久	大正2年2月	ラケット生地フレーム		771
36		小原玉台製作工場	東京芝区西久保廣町	大正13年3月	玉突台	石田喜太郎	771
37		東京玉台製作所	東京芝区金杉浜町	昭和4年6月	玉突台		772
38		中村ラケット工場	東京小石川区大塚坂下町	明治45年7月	其他		772
39		東京木工製作所	東京府北葛飾郡	明治38年10月	運動用具	渋谷幸道	772
40		月岡スキー製作所	新潟県高田市馬出町	明治43年10月	スキー	月岡源吉	773
41		三間スキー製作所	新潟県高田市呉服町	明治44年11月	スキー	三間博	773
42		高田スキー製作所	新潟県高田市下小町	大正8年4月	スキー	古川甚三郎	773
43		小林スキー製作所	新潟県高田市上小町	明治26年5月	スキー	小林重八	773
44		山善スキー製作所	新潟県高田市呉服町	明治40年3月	スキー	山田善四郎	773
45		松田製作所	石川県能美郡白峰村	昭和4年6月	スキー材料	小田松次郎	773
46		池村洋家具製作所	石川県金沢市上大樋町	明治20年3月	学校運動具	池村正三郎	773
47		波田運動具製作所	富山県福光町	大正2年5月	バット、スキー	波田善六	774
48		山田工場	岐阜県不破郡垂井町	大正8年3月	運動具	山田甚六	774
49		電騨木工株式会社工場	岐阜県大野郡大名田町	大正12年10月	運動具曲木椅子	白川佐一郎	774
50		静岡体操器具製作所	静岡県静岡市北番町	昭和2年7月	肋木、横木、バスケットボール台		774

No.	部	工場名	住所	創業年月	製造品目	創業者名	掲載頁
51	製材及び木製品工業の部	加藤玉突台製作所	名古屋市東区新道町	大正12年1月	玉突台	加藤源二郎	775
52		武藤商会	名古屋東区門前町	明治42年1月	玉台枠キュー		775
53		米澤体育器械製作所	大阪府港区大正通	昭和3年5月	肋木、鉄棒	米澤嘉代次	777
54		森下製作所	大阪府堺市三国丘	大正10年9月	運動具取合其他	木下松太郎	777
55		選ラケット工場	大阪東成区大今里町	大正15年4月	ラケット	選健治	778
56		喜多ラケット製作所	大阪東成区	大正10年4月	輸出ラケット		778
57		伊藤長ラケット製作所	大阪東成区鶴橋北ノ町	明治30年7月	ラケット枠	伊藤長吉	778
58		久松堂体操器具製造工	鳥取県鳥取市東品治村	大正14年3月	体操器具	松本哲治	780
59		一谷体操家具製作所	鳥取県鳥取市東品治村	大正6年10月	体操用具洋家具	一谷甚一	780
60		都村体育機械製作所	香川県木田郡琴平町	明治44年10月	木製品体育機械	都村精一	781
61		中島玩具製作所	福岡県福岡市上辻ノ堂町	大正10年5月	木馬、小馬	中島彌助	782
62	其の他の工業の部	玉澤運動具工場	東京牛込区山吹町	大正元年	靴	玉澤敬三	1065
63		金澤運動具工場	東京本郷区駒込坂下町	明治42年	ミット、バット	金澤助三郎	1065
64		原サンダル運動具工場	東京浅草区聖天町	昭和3年7月	靴	原喜一郎	1065
65		岡田野球具革手袋製作所	東京小石川区表町	大正9年7月	皮革製品	岡田初太郎	1065
66		飯重運動具手袋製作所	東京府北豊島郡南千住町	明治44年	フットボール	飯重豊三郎	1065
67		東京運動靴製作所	東京府北豊島郡南千住町	大正12年10月	運動靴	白山鐵次郎	1065
68		北海ゴム工業合資会社	北海道小樽市入舟町	大正8年10月	ゴム底ズック運動靴	中村利三郎	1117
69		中田足袋工場	埼玉県北埼玉郡忍町	明治15年3月	帆布表運動靴	中田茂助	1117
70		木村商店	東京下谷区豊住町	明治33年3月	運動靴	木村栄一	1117
71		千住運動靴工業所	東京府南足立郡千住町	大正15年9月	運動靴	小澤直司	1117
72		渡邊製作所	東京下谷区坂本町	大正13年4月	運動靴		1117
73		木和田商会	東京下谷区入谷町	大正13年4月	運動靴	木和田信次	1117
74		飯塚工場	静岡県志太郡大富村	大正10年2月	運動靴	飯塚治朗	1118
75		森工場	大阪東区清水谷西之町	大正12年4月	運動靴	森元一	1118
76		尾崎足袋工場	大阪府中河内郡布施町東足代	大正13年7月	運動靴	尾崎源太郎	1118
77		生野ゴム工業所	大阪府中河内郡加美村		運動靴	並河武雄	1118
78		阪南ゴム株式会社	大阪府西成区汐路通五	大正9年4月	運動靴	赤松大一郎	1118
79		丸Ａゴム工業所	大阪府西淀川区浦江中二	大正7年3月	運動靴	正田善八	1118
80		宏和ゴム工業所	神戸常磐町	大正12年10月	運動靴	宮島治朗	1118
81		富士登商会	岡山県児島郡敷戸町	大正8年9月	運動靴		1118
82		高原ゴム合資会社運動靴製造工場	岡山県岡山市新西大寺町	大正11年4月	運動靴	高原又市	1118
83		江口足袋工場	岡山県岡山市巌井町	大正10年1月	運動靴	江口秀一	1118
84		蔓年屋足袋工場	岡山県都窪郡帯江村	明治29年3月	運動靴	藤木伊太郎	1118
85		いわゐ足袋工場	岡山県岡山市大供	大正元年9月	運動靴	板谷菊	1118
86		大橋製靴工場	広島県広島市十日市町	大正7年4月	運動靴	大橋亀吉	1118
87		丸安運動靴製造場	広島県広島市猿楽町	大正10年2月	運動靴	安田千代太	1118
88		キリン足袋本店	広島県呉市西本通り	大正12年4月	運動靴	橋本貫一	1118
89		馬場商会	香川県綾歌郡坂井町	大正11年	運動靴	馬場垣市	1118
90		金澤運動具工場	東京本郷区駒込坂下町	明治42年11月	バット、ミット	金澤助次郎	1122
91		美満津商店亀戸工場	東京府南葛飾郡亀戸町	明治18年5月	運動器械		1122
92		高木鉄工場	石川県金沢市高岡町	大正5年7月	運動具、農具	高木幸次郎	1124
93		田中ガット工場	大阪東成区大今泉町	大正2年2月	ガット加工品	河井安次郎	1126
94		日ノ出製弦所	大阪東成区中道町	大正5年1月	テニスガット	田中又次郎	1126
95		関西運動具製作所	大阪港区高尾町１	大正7年2月	バスケット用金具	久保彌三郎	1126
96		美津濃運動用品株式会社浦江工場	大阪西淀川区浦江本通2	大正12年8月	靴、ボール、運動衣	水野利八	1126
97		田中安ガット工場	大阪東区寺山町	大正3年9月	ラケット用ガット	河井安次郎	1127
98		松下ラケット製作所	大阪東区紀伊國町	大正3年2月	ラケット	松上實	1127
99		伊東木工場	奈良県宇智郡五条町	大正15年8月	玩具ラケット	伊東五良	1128
100		山田撃剣道具製作所	広島県広島市鉄砲町	明治29年11月	撃剣具、柔道着	山田善太郎	1129
101		森武具製造所	長崎県長崎市西中町	大正2年8月	撃剣道具	森義太郎	1130

注）『全国工場通覧Ｉ昭和６年版②（復刻版）』、柏書房、1992年より著者作成。

いる。

つまり、この地籍図の調査時期であった1910（明治43）年時点では、柳島449番地には、「上條鉛筆工場」があり、後にこの地に美満津商店亀戸工場が建設されたのであった。しかしながら、工場絵図と比較すると、柳島449番地だけでは十分な面積があったとは思えず、隣接した450－458番地にあった「大和ゴム会社」との関係も含め再検討しなければならない。

カタログ絵図の美満津商店亀戸工場はいつから営業をはじめ、それ以前の美満津商店の工場、作業場は、いったいいつから、どこで営業していたのだろうか。次に、政府機関の工場調査報告をもとにこの疑問点に接近してみたい。

3. 政府・地方行政機関の工場調査における美満津商店製造工場

戦前期における日本の政府行政機関の主要な工場資料には、1904（明治37）年以降、農商務省・商工省・通商産業省などの行政機関によって調査・公表された『工場通覧』がある。『工場通覧』（社団法人日本工業倶楽部発行）は、1935（昭和10）年まで職工数5人以上の工場を調査対象とした。同通覧は、1921（大正11）年版の発行以後、1931（昭和6）年の『全国工場通覧』（日刊工業新聞社発行）が刊行されるまで絶版となっている。

『工場通覧』において、初めて美満津商店に関する記述が確認されるのは、1921(大正10)年11月発行のものに記載される「美満津商店研工社工場」である。同通覧は、製品種類で分類されているが、この「美満津商店研工社工場」は、「第45類雑業」に分類され、製品種類「運動用具」、所在地「本郷区本郷五ノ三九四〇」、工場主「伊東卓夫」、創業年月「明治四四、五」と記され、職工数は男46人、女3人の計49人で原動力は、「その他の動力」で実馬力が「五」となっていた[17]。美満津商店には、亀戸工場の他に本郷の店舗の近所（図6の□で囲まれた部分）に別名会社の工場があったことが明らかになった。

『全国工場通覧』では、1931（昭和6）年版から美満津商店亀戸工場が掲載されている。ちなみに、同通覧では、全国の金属工業、化学工業・製材及び木製品工業・其の他の工業において101の体育・スポーツ関連用品の製造工場が記載されており、これを示した表1のNo.91が同工場に関する記述内容である[18]。これによると美満津商店亀戸工場は、1885（明治18）年5月に営業を開始している。ただし、前述した美満津商店亀戸工場の所在地に関する点とこの『全国工場通覧』には亀戸町内の地名・番地が明記されていない点から、1885（明治18）年5月に美満津商店の初期の工場は、柳島449番地以外の亀戸のどこかにあったと考えたほうがよい。

さて、先述した武見の研究では、「東京市工場要覧」を分析して1930年代の東京市の工場分布を明らかにしている。そこで、著者が現時点において入手し得た1924（大正13）年、1925（大正14）年、1928（昭和3）年、1931（昭和6）年の「東京市工場要覧」を調査したところ、美満津商店工場については、表2のように記述されていた。残念なことに、これらの要覧では、「伊東」が「伊藤」と誤記されていること、研工「社」と研工「舎」の違いなどがあることから、所在地や設立年月の記述に疑義が生じる。しかしながら、少なくとも柳島449番地の亀戸工場は、1911（明治44）年以後営業を始めたことと、1928（昭和3）年以後は、「美満津商店研工社

表2 『東京市工場要覧』における美満津商店工場記述

発行年	製品名	工場名	工場主	所在地	設立年月	職工数		
						男	女	計
1924（大正13）	体操器械	研工社	伊東卓夫	本郷区本郷五ノ三九及四〇	明治四三、二	17	4	21
	運動具	合資会社美満津商店	－	南葛飾郡亀戸町柳島四四九	明治四四、八	46	－	46
1925（大正14）	運動具	研工舎	伊藤卓夫	本郷区五丁目三九	明治四三、一二	9	－	9
	運動具	合資会社美満津商店	伊藤卓夫	南葛飾郡亀戸町柳島四四九	明治四四、一	26	－	26
1928（昭和3）	運動具	合資会社美満津商店	伊藤卓夫	南葛飾郡亀戸町三ノ九二	明治四一、七	21	－	21
1931（昭和6）	運動具	合資会社美満津商店	伊藤卓夫	南葛飾郡亀戸町三ノ九二	明治四一、七	18	－	18

注：『東京市工場要覧』（大正13年：81頁、大正14年：510頁、昭和3年：606頁、昭和6年：472頁）、東京市商工課編より。

工場」の記述がなくなったという事実は確認できた。

4. おわりに

これまで1923（大正12）年発行の美満津商店カタログの亀戸工場絵図と政府並びに東京市による工場調査統計を手がかりとして、美満津商店製造工場について明らかにしてきた。

美満津商店は、1882（明治15）年5月に創業してから3年後の1885（明治18）年5月には、東京都南葛飾郡亀戸町のどこかに工場をひらき、その後1910（明治43）年の2月か12月あるいは翌年の1911（明治44）年5月に、美満津商店店舗の近隣の本郷区5丁目39番地と40番地に「美満津商店研工社（舎）」と称する「工場」を少なくとも1927（昭和2）年まで営業していたと考えられる。そして、美満津商店カタログの絵図で示されたような「亀戸工場」は、1911（明治44）年1月か8月に、もと「上條鉛筆製作所」があった「東京府南葛飾郡亀戸町柳町449番地」において営業をはじめたことが明らかになった。

ただし、絵図と地籍等との関係から隣地の柳町450番地で創業していた「大和ゴム製造所」や上條鉛筆工場の動向と照応させ所在地、営業年月日をより一層明確にしなければならない。ただ、1909（明治42）年現在の状況を掲載した1911（明治44）年発行の『工場通覧』から「大和ゴム製造所」の営業が記載され、1920（大正9）年現在の状況を掲載した1921（大正10）年発行の『工場通覧』以後、同ゴム製造所の記載はなくなる。つまり、美満津商店は、1920（大正9）年以降に大和ゴム製造所のあった土地に「亀戸工場」を拡大することが可能であったと予想されるが、1928（昭和3）年と1931（昭和6）年発行の『東京市工場要覧』における「美満津商店亀戸工場」の創業年月と所在地の検証も含め、同工場が1885（明治18）年5月以後亀戸のどこで営業していたかを明らかにすることは、今後の課題としたい。

課題は残るが、美満津商店の商品製造は、1885（明治18）年から職工50人未満の規模による家内的工業として始まり、その営業は1910年代から2つの新しい工場をひらくまでに拡大した。そして、1923（大正12）年以後、東京市南葛飾郡亀戸町において、『THE MIMATSU'S Catalogue 1922－1923』の絵図に示された大規模工場が営業されたのであった。

注

1）伊東卓夫に関しては、拙稿「伊東卓夫『美満津商店』創業までの経緯」（『体育、スポーツの近現代―歴史からの問いかけ―』、不昧堂、阿部生雄監修、2011年、218－231頁。）を参照。

美満津商店は、1890（明治23）年4月から7月まで開催された第3回内国勧業博覧会では、「伊藤（ママ）卓夫（神田区猿楽町2丁目）」として体操・スポーツ用具類を出品している。

しかし、1895（明治28）年7月に開催された第4回内国勧業博覧会では、「伊東卓夫（本郷区本郷5丁目）」として体操・スポーツ用具類を同商店は出品している。（大櫃敬史「体操用具国産化への道：初期の内国勧業博覧会および教育博物館の出品物を通じて－」、北海道大学教育学部紀要54号、1990年、20頁。『明治前期産業発達史資料勧業博覧会資料82「第5部教育及学術　第4回内国勧業博覧会出品目録5第4回内国勧業博覧会事務局」』、明治文献資料刊行会、1974年、3－4頁。）

2）1900（明治33）年1月発行の『運動界』第4巻1号の美満津商店広告に記載される同商店所在地が、それまでの広告に記載されていた所在地「東京市本郷5丁目10番地」から「東京市本郷5丁目10番地12番地」に変更されている。

3）美満津商店の製造・販売商品については、拙稿「20世紀初頭における日本のスポーツ用品産業―1902（明治35）年発行『美満津商店定価表No.18』の分析」（『下関市立大学論集』第57巻第2号2013年9月、17－33頁。）を参照。

美満津商店発行『美満津商店総目録No.19』（1904年）は、日本大学文理学部図書館に所蔵されている。

4）美満津商店発行『美満津商店目録』（1909年）は、著者所有。

5）梅村又次他編著、『日本経済史第4巻：産業化の時代（上）』岩波書店、1990年、7－8頁。

6）『MIMATSU GYMNASIUM & PLAY GROUND APPARATUS』、THE MIMATSU & COMPANY. ING.、1928年。

7）『THE MIMATSU'S Catalogue 1922－1923』は、東京神田神保町の古書店「秦川堂」から著者が入手したもので、下関市立大学付属図書館に所蔵されている。

8）美満津商店発行『Mimatsu's Sport Goods』（1928年）は、著者所有。

9）前掲5）によれば、20世紀初頭、日本型水車を含む無

動力のものは、約3万2千の全調査工場の内77％であり、蒸気機関、ガス・石油機関、発動機・電動機を装備した工場は全体の4分の1にも満たなかったが、その後蒸気機関を装備した工場が膨れていくとしている。また、鉄道などと比較して水運運搬が、当時最も廉価であった。

10）伊東卓夫の末裔の方から「本郷にお店、亀戸に自宅と工場、軽井沢に夏だけオープンするお店と別荘があり、この別荘は竹渓庵と呼んでいた」という情報を得ている。

11）遠藤毅、「東京低地における工場分布の変遷と21世紀初頭の工場跡地の利用状況」、『地学雑誌』116（5）、2007年、593－626頁。

12）武見芳三、「大東京地域の工場分布―工業位置決定の要因―」、『地理学評論』6（7）、1930年、921頁。

13）玉澤敬三編纂『東京運動具製造販売業組合史』「第二編　東京運動具製造販売業組合史」、東京運動具製造販売業組合、1936年、61－70頁。

14）東京府南葛飾郡亀戸町は、1932（昭和7）年から城東区となり、現在は江東区に位置する。美満津商店亀戸工場の現在の住所は、東京都江東区亀戸3丁目38－13あたりである。

15）『地籍台帳・地籍地図［東京］第4巻、地図資料編纂会編（復刻版）』、柏書房、1989年、236頁。

　地籍台帳・地籍地図とは、いわゆる公図を縮小編集し、土地台帳に基づく一筆毎の明細を添えた大縮尺の地図帳と定義され、別名「土地宝典」と呼び慣わされるものである。この資料は、各地域の土地所有者名簿を備え、類書のなかでも基も傑出した内容を誇るとされる。

16）同上、141頁。

17）『工場通覧Ⅷ（大正十年刊）（復刻版）』、柏書房、1992年、340頁。

18）『全国工場通覧２昭和6年版②』（復刻版）、柏書房、1992年。